The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	方言接触が生み出した言語変種に見られる言語的特徴：引用形式「ト」のゼロマーク化を例に
Author(s)	朝日，祥之
Citation	阪大日本語研究. 2003, 15, p. 41-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9699
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』15（2003）

方言接触が生み出した言語変種に見られる言語的特徴
－引用形式「ト」のゼロマーク化を例に－
Linguistic Features in a Contact-based Language Variety -Evidence from Zero-marking of Complementizer *to*-

朝日　祥之
ASAHI　Yoshiyuki

キーワード：方言接触、ニュータウン、ゼロマーク化、引用形式「ト」、水平化

【要旨】

本稿では、方言接触の結果生まれた言語変種に見られる言語的特徴について、西神ニュータウンにおける引用形式のゼロマーク化を例に分析を試みた。旧来から存在する地域社会における引用形式のゼロマーク化に関わる制約条件を基準とし、西神ニュータウンにおけるゼロ形のあり方に見られる特異性について考察した。その結果、西神ニュータウンでは、ゼロ形は動詞型引用表現にのみに使用されるといった制約条件が存在することがわかった。また、ゼロ形や「チュー」などといった方言的性格の強い複数の引用形式が「ッテ」に置き換わるといった水平化現象や、動詞型引用表現で使用される「引用形式『ッテ』＋動詞『いう』」のパターンが名詞型引用表現まで拡張使用されるといったことも明らかとなった。

1．はじめに

全国各地で開発が進んでいるニュータウンは、様々な方言背景を持つ人々で構成される地域社会である。ニュータウンには移住先の方言となる受容方言が存在しないことから、移住者が持ち込んだ方言間の接触によって新しい言語変種（または、ニュータウンコイネ New Town Koine）が形成されることが予想される。本稿では、この言語変種が形成されていくプロセスに見られる言語的特徴について、神戸市西区に所在する西神ニュータウンにおける引用形式「ト」のゼロマーク化を例として、明らかにすることを目的とする。

以下第2節で、引用形式「ト」のゼロマーク化の定義付けを行ったあと、当該現象に関わる制約条件を整理し、分析の対象となる点を示す。第3節で調査概要を述べ、第4節でゼロマーク化に関わる言語内的要因・外的要因について分析する。第5節で、分析で明らか

となった点がニュータウンという地域社会に特有なのかどうか検討し、最後に第6節でまとめと今後の課題について述べることにする。

2．引用形式「ト」のゼロマーク化とは

関西方言をはじめとする西日本諸方言において、引用形式「ト」は「言う」や「思う」などの引用動詞に先行する場合に脱落することは、よく知られている。本稿では、このような引用形式の脱落現象を「ゼロマーク化」、ゼロマーク化によって実現した形式を「ゼロ形」と称することにする。これまで、このゼロマーク化現象をめぐって言語内的要因、言語外的要因が存在することは指摘されてきた（Saito 1987、岸江1991、前田1979、高永1986等）。以下、ゼロマーク化に関わる言語内的要因と言語外的要因について明らかにされた点を概観し、本稿で分析の対象とする点を整理する。

2．1．ゼロマーク化に関わる言語内的要因の概観

これまで当該現象にめぐる言語内的要因については、（a）引用動詞でも「言う」と「思う」に先行する場合に観察される（楳垣1962、神鳥 1998等）という指摘や、（b）埋め込み文が動詞句内に生起する場合に使用される場合にゼロマーク化が観察されるという指摘（Saito 1987）がなされている。以下、その概要をまとめておく。

（a）引用動詞「言う」「思う」に先行する場合にゼロマーク化が観察される

ゼロマーク化は、例(1)～(4)に示すように、引用動詞でも「言う」「思う」に先行する場合に観察される

(1) なんでっしゃろかー　φ　いいよったら　[HF 2001-96-33-12][1)]

(2) □□は　いらん　φ　ゆーねん　[HA 2001-74A-48-19]

(3) 代表者に　しよー　φ　おもったら　できひんのや　[HA 2001-74A-32-09]

(4) うまいこと　つないだ　φ　おもわへん　[HF 2001-96-16-31]

また、この際、例(5)(6)などのように埋め込み文末の音が長音化したり、例(7)(8)のように引用動詞がウ音便化したりする。

(5) 屋根が　傷むー　φ　ゆーて　いつも　ことわりよった　[HD 2001-97-06-16]

(6) あんまり　きーつけて　見てへんしー　φ　ゆーて　[HE 2001-96-12-35]

(7) パンク　φ　ゆーたら　見にいかなあかんしー　[HB 2001-74A-14-26]

(8) できるだけ　勉強するさかい　ゆーて　[HA 2001-74A-19-15]

しかしながら、これまでの研究の多くは、この現象の指摘にとどまるものであり、引用形式が生起する言語内的条件に関する分析はほとんどなされていない。

(b) 埋め込み文が動詞句内に生起する場合にゼロマーク化が観察される

Saito (1987) は、引用形式のゼロマーク化に関わる統語的制約について生成文法の立場から論じたものである。Saito (前掲) では、神戸方言を例に、補文標識である「ト」が述部の動詞の支配を受ける時に脱落できることを、空範疇原理 (ECP)[2)]を用い分析している。例えば、例 (9) において補文「Koobe-ni iku」の後の補文標識「*te*」は、その文の動詞である「yuuta」の支配を受ける（つまり、補文がVP内にある）と脱落できるが、例 (10) のように、主体化(topicalisation)が起き、補文標識「*te*」が動詞「*yuuta*」の支配を受けなくなる（つまり、補文がVP外にある）と、「*te*」は脱落できなくなるのである。

(9) John-wa　[$_{\bar{S}}$Koobe-ni iku(te)] yuuta　　(Saito(1987)の例文27-a)

[$_{S}$ John-wa[$_{VP}$[$_{\bar{S}}$[*spro* Koobe-ni iku] *e*]yuuta]]　(Saito(1987)の例文41-a) [3)]

(10) [$_{\bar{S}}$ Koobe-ni　iku *(te)] John-wa yuuta　　(Saito(1987)の例文28-a)

[$_{S}$[$_{\bar{S}}$[$_{S}$ pro Koobe-ni ikuu]*e*]i [$_{S}$ John-wa[$_{VP}$ ti. yuuta]]

(Saito(1987)の例文41-b)

２．２．本稿の分析の対象とする言語内的要因

前節では、先行研究で示された言語内的要因について整理した。しかしながら、自然談話資料を用いた分析を行う際、先行研究で示された条件では説明できない点が多く存在する。以下、自然談話資料でゼロマーク化が確認された言語内的条件でも、本稿で分析の対象とする条件について整理することにする。

本稿では、(a)埋め込み文が動詞句内に生起する場合（以下、動詞型引用表現と称する）、(b)埋め込み文が連体修飾節を構成する場合（以下、名詞型引用表現と称する）を分析の対象とする。以下、それぞれの場合における条件についてまとめておく。

(a) 動詞型引用表現の場合

これに該当するのは、埋め込み文が(a-1)文末で用いられる場合と、(a-2)従属節末で用いられる場合である。

(a-1) 文末で用いられる場合

Saito(1987)で検証された条件である。

(a-2) 従属節末で用いられる場合

例(11)(12)のように、埋め込み文が接続助詞と共起し、従属節末に生起する場合である。

(11) でー　らっきゃ　らっきゃ　φ　いわれたら　らっきょかな　おもーて

[HF 2001-96-33-12]

(12) そんな　無茶　すんなー　φ　ゆーて　おこっとーけど　[HF 2001-96-01-32]

なお、話し言葉おいて、例(13)(14)のように接続助詞が後節を伴わずに生起する形で使用されることも多い。このような接続助詞は、「省略」「言い残し」や「言い終わり」（白川1996）、終助詞的な使用（国立国語研究所1951、高橋1993、南1993）などと呼ばれることもある。そこで、本稿では、このような場合は文末として扱うことにする。

(13) 目には　ええ　φ　ゆーけど　[HF 2001-96-25-4]

(14) ガイドせーよ　φ　いわれて　[HF 2001-97-25-28]

(b) 名詞型引用表現の場合

これが該当するのは、(b-1)「提題」を表す場合と(b-2)「同格」を表す場合である。

(b-1) 提題を表す場合

例(15)(16)のように、主題を表す場合である。

(15)お金が　出るんか　φ　ゆーのは　問題や　[HA 2001-74A-18-03]

(16)で　□□　φ　ゆーのは　□□って書いてあったわ　[HF 2001-96-08-09]

(b-2) 同格を表す場合

例(17)(18)のように連体節を取る場合である。

(17) 結局　□□　φ　ゆー人はな　[HA 2001-74B-00-26]

(18) あっこに　あげて　やったら　φ　ゆー　案が　出て　[HA 2001-74A-37-23]

2．3．ゼロマーク化に関わる言語外的要因の概観

次に、言語外的要因に着目した研究についてまとめると、(a)年齢差に着目した岸江(1992)と(b)場面差に着目した前田（1977）、岸江（1992）高永（1986）に大別できる。

(a) 年齢差

岸江（前掲）は「田中という人」という調査文を用いた通信調査を行った結果、老年層では「～ユー、～チュー」が多用されるが、若年層では、「ッテユー」「トユー」が使用されると指摘している。ゼロマーク化は老年層では観察されるものの、若年層では見られなくなることがこの結果から窺える。

(b) 場面差

岸江（前掲）では年齢差の他に「改まった場面」「くだけた場面」と２つの調査場を設定している。その結果、形式の使い分けが見られ、ゼロマーク化は「くだけた場面」のみに限りかぎられる事が示された。この他、高永（前掲）、前田（前掲）においても「くだけた場面」の方が「改まった場面」よりもゼロ形が使用されやすいことが明らかにされている。

２．４．本稿が分析の対象とする言語外的要因

本稿では、(a)年齢差に着目し、老年層、中年層、若年層に見られる特徴を言語内的条件ごとに分析し、ゼロマーク化のあり方について考察する。なお、本稿が用いる自然談話資料では(b)場面差を分析するのに耐える量がないため、分析の対象外とする。

３．調査概要

３．１．調査地点：西神ニュータウンと神戸市西区櫨谷（はぜたに）町（図1と図2）

図１　西神ニュータウンの位置

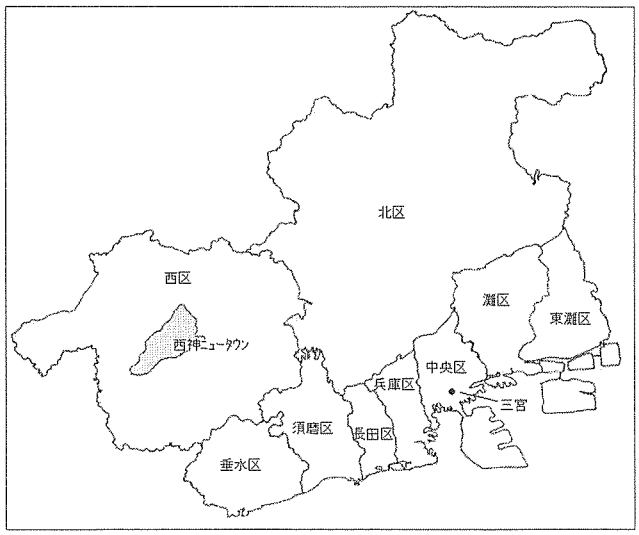

図２　西神ニュータウンと櫨谷町の位置

a　西神ニュータウン：神戸市第４次基本計画のもとに開発された（神戸市港湾整備局1995）。人口は50,654人（平成12年度国勢調査）。出身地に関する資料は存在しないため、発表者が行った調査に参加してくださったインフォーマントの出身地を参考までに表１に挙げておく。

表1　西神ニュータウン居住者の出身地

出身地 / informant	神戸市	関西地方	中国・四国地方	九州・沖縄地方	関東地方	中部地方	合計
人数	84	59	17	12	8	5	185
割合（%）	45.4	31.9	9.2	6.5	4.3	2.7	100

b　櫨谷町：明治32年に9つの集落が「櫨谷村」として統合され、現在の「櫨谷町」となった（福谷自治会古里創成誌編集委員会1997）。人口は2,749人（平成12年度国勢調査）の農村である。

３．２．調査期間：2000年3月～2001年9月

３．３．インフォーマント

本稿では、西神ニュータウンと櫨谷町に居住する21人の談話資料を分析の対象とする。その内訳を表2に示した。

表2　インフォーマントの内訳

	西神ニュータウン		櫨谷町
	兵庫県内出身者	他地方出身者	
老年層			3
中年層	3	3	3
若年層	3	3	3

インフォーマントは、年齢、出身地によって次のように分けた。まず、西神ニュータウン居住者は、出身方言にゼロ形の使用が見られる兵庫県出身者とその他の地域からの出身者のグループを作り、それぞれのグループでインフォーマントを年齢によって中年層と若年層に分けた。若年層は全員西神ニュータウンで言語形成期を過ごしているため、両親の出身者をもとにグループ分けを行った。次に櫨谷町居住者は年齢によって、老年層・中年層・若年層の3つのグループに分けた。すべての居住者は言語形成期を櫨谷町で過ごしている。インフォーマントに櫨谷町の老年層を入れたのは、この年齢層が旧来から存在する地域社会において、もっとも伝統的な方言体系を持ち合わせているからである。分析では老年層インフォーマントに見られる特徴を基準にし、櫨谷町と西神ニュータウンのそれぞれにおける言語変容のプロセスから、ニュータウンという移住者社会に見られる特異性について検討していく。

3．4．　調査方法

本稿で使用するデータの収集にあたって、2つの方法を採用した。

(a) 友人同士による自然談話の録音

西神ニュータウン居住者のデータ収集には、友人同士による自然談話を収集する方法を採用した。発話への注意度を最小限に押さえるため、普段から西神ニュータウンで付き合いのある友人との会話を収録した。また、観察者の逆説（Observer's Paradox）（Labov 1972）を避けるために、調査者は同席せずに、インフォーマントに録音をしてもうようにした。本稿で使用する談話データは同じグループに属するインフォーマントによる自然談話を使用している。録音時間は1談話につき60分であるが、数量的に検証するために、インフォーマントによっては120分の談話データを分析の対象としている。

(b) グループセッションによる録音

櫨谷町居住者の談話はグループセッションによる録音で収集した。それぞれの年齢

層のインフォーマントに集まってもらい、１時間半から２時間の自然談話を収録した。インフォーマント同士は全員幼少の頃から付き合いがあり、極めて自然に近い談話を収集することができた。

表3　談話データ一覧

			話者	出身地	年齢	話し相手	録音時間
西神ニュータウン	兵庫県内出身者	中年層	GA	神戸市	51	GC	60分
			GB	神戸市	50	GF	60分
			GC	加古川市	44	GA	60分
		若年層	GD	西神NT	24	GE、GF	120分（60分×2）
			GE	西神NT	19	GD	60分
			GF	西神NT	25	GE、GB	120分（60分×2）
	他地方出身者	中年層	TA	宮崎県	46	TB、TC	120分（60分×2）
			TB	愛知県	49	TA	60分
			TC	長崎県	46	TA	60分
		若年層	TD	西神NT	19	TE	60分
			TE	西神NT	20	TD、TF	120分（60分×2）
			TF	西神NT	19	TE	60分
櫨谷町	老年層		HA	櫨谷町	74	HB、HC	90分
			HB	櫨谷町	68	HA、HC	90分
			HC	櫨谷町	60	HA、HB	90分
	中年層		HD	櫨谷町	40	HE、HF	90分
			HE	櫨谷町	38	HD、HF	90分
			HF	櫨谷町	39	HD、HE	90分
	若年層		HG	櫨谷町	14	HH、HI	120分
			HH	櫨谷町	14	HG、HI	120分
			HI	櫨谷町	13	HG、HH	120分

このようにして収集した合計13時間分の自然談話データを分析の対象とする。収集方法が異なることによって、実際に使用される形式にも違いが生まれることも考えられるが、いずれの方法もくつろいだ場面にできるだけ近い場面での談話を収集することを目的としていること、そしてインフォーマント同士が親密な関係にあることから、収集方法による

違いは見られないと判断した。

以下では、この自然談話データを用い、ゼロマーク化に関わる言語内的・外的制約条件について分析を試みる。

4．分析

本節では、西神ニュータウンにおける引用形式の使用のあり方に関わる言語内的要因、および、言語外的要因について分析する。まず、4.1節で櫨谷町老年層における引用形式のゼロマーク化に関わる言語内的条件を整理し、分析の基準となる条件を提示する。次に4.2節で、それぞれの条件に関わる言語外的要因について、特に年齢差と地域差に着目しながら分析を試み、西神ニュータウンと櫨谷町で起きている言語変容のあり方を明らかにしていく。

4．1．櫨谷町におけるゼロマーク化に関わる言語内的要因

本節では、櫨谷町老年層インフォーマント3人の自然談話資料に見られるゼロ形の使用に関わる言語内的条件について数量的に検証する。分析には、カイ二乗検定を行い、それぞれの条件においてどの要因がゼロマーク化と関わっているのかについて検証していく。表4は、制約条件ごとにおける使用のあり方についてまとめたものである。

表4　櫨谷町老年層におけるゼロマーク化に関わる統語条件

	統語条件	ゼロ形(%)	実数	χ^2	*df*	有意性
動詞型引用表現	文末	85.7	54/63	1.313	1	$p. < 0.252$
	従属節末	92.5	49/53			
名詞型引用表現	提題	75.9	22/29	.649	1	$p. < 0.411$
	同格	82.7	67/81			

表4から老年層インフォーマントに見られる特徴を条件ごとにまとめておく。

(a) 動詞型引用表現の場合

全体的に見ると、「文末」「従属節末」ともにゼロ形の使用率がそれぞれ85.7%、92.5%と非常に高いことがわかる。Saito(1987)の分析では単文の文末におけるゼロマーク化を扱っていた。ここから、埋め込み文が置かれる統語的条件に関わることなくゼロ形は使用可能であることがいえる。

次にそれぞれの環境に目を向けると、「従属節」の方が「文末」よりもゼロマーク化の割合が高いことがわかる。しかしながら、2つの条件の間に有意差は見られないことから、両者の間に違いは見られないといえる。

(b) 名詞型引用表現の場合

「提題」「同格」ともに、ゼロマーク化率はそれぞれ75.9%、82.9%と高いことが表からわかる。ここでも、Saitoが検証しなかった条件においてゼロマーク化が観察されることが確認できる。「提題」と「同格」が使用される割合から、「同格」の方が「提題」よりもゼロ形が多く使用されていることがわかる。しかしながら、この条件においても両者の間の有意差は見られないことから、両者の差異は認められないといえる。

(c) 両者の比較

(a)と(b)で、動詞型引用表現と名詞型引用表現のそれぞれにおけるゼロ形の使用のあり方について分析してきた。ここで、どちらの条件がゼロマーク化を促す要因となるのかについて検討する。表5にそれぞれの条件における結果をまとめた。

表5　櫨谷町老年層におけるゼロマーク化に関わる言語内的条件の比較

	ゼロ形(%)	実数	χ^2	*df*	有意性
動詞型引用表現	88.8	103/116	2.746	1	*p.* <0.098
名詞型引用表現	80.9	89/110			

表5から、動詞型引用表現の方が名詞型引用表現よりもゼロ形の使用率が高いことが見てとれる。しかしながらここでも有意差は得られず、両者の間には差異は見られないといえる。

以上、櫨谷町老年層居住者に見られる引用形式の使用から、ゼロマーク化に関わる言語内的条件について検討してきた。表6に分析から明らかとなったことをまとめておく。

表６　櫨谷町老年層におけるゼロマーク化に関わる言語内的条件

	ゼロ形の使用率			有意差
動詞型引用表現	従属節末	＞	文末	なし
名詞型引用表現	同格	＞	提題	なし
全体	動詞型引用表現	＞	名詞型引用表現	なし

表6から、全体的な傾向として、ゼロ形の使用をめぐる条件間の関係は把握できるものの、いずれの条件においても有意差は見られないことが明らかとなった。これは言い換えれば、もっとも伝統的方言体系を持つ老年層の間では、ゼロマーク化に関わる制約条件は存在せず、どの環境においてもゼロ形が使用可能であるといえる。

以下では、櫨谷町と西神ニュータウンにおいてゼロマーク化がどのように使用されているのかについて検討していく。またそれぞれの地域における特徴から、本節で示された傾向がどのように変容していくのかについて明らかにしていく。

4．2．ゼロマーク化に関わる言語外的要因

本節では、櫨谷町と西神ニュータウンにおけるゼロマーク化のあり方について、2.2節で示した言語内的条件をもとに検討する。以下、4.2.1節で櫨谷町におけるゼロマーク化のあり方を、中年層、若年層のそれぞれについて検討し、櫨谷町における言語変容のプロセスを老年層のデータを基準にして抽出する。次に、4.2.2節で西神ニュータウンでも兵庫県出身者におけるゼロマーク化に見られる特徴について分析し、西神ニュータウンにおける言語変容プロセスを櫨谷町におけるプロセスと比較しながら明らかにしていく。

4．2．1　櫨谷町におけるゼロマーク化に関わる制約条件

まず、櫨谷町中年層、若年層インフォーマントに見られるゼロマーク化に関わる制約条件について考察することにする。その結果を表7にまとめた。

表７　櫨谷町中年層・若年層におけるゼロマーク化に関わる統語条件

	統語条件	ゼロ形(%)	実数	χ^2	*df*	有意性
中年層話者						
動詞型引用表現	文末	79.4	189/238	.000	1	*p*.< 0.982
	従属節末	79.3	92/116			
名詞型引用表現	提題	29.2	7/24	7.738	1	*p*.< 0.005
	同格	67.9	19/28			
若年層話者						
動詞型引用表現	文末	10.0	12/120	.994	1	*p*.< 0.319
	従属節末	5.5	3/55			
名詞型引用表現	提題	0.0	0/14			
	同格	0.0	0/12			

表７から櫨谷町の中年・若年層インフォーマントにおけるゼロ形の使用に関わる統語的制約を(a)動詞型引用表現、(b)名詞型引用表現の順にまとめておく。

(a) 動詞型引用表現の場合

全体的な傾向として、ゼロ形が使用される割合は中年層では79％と高いものの、若年層では10％と低くなることが挙げられる。条件ごとに見ると、中年層、若年層ともに、「文末」の方が「従属節末」よりもゼロ形の使用率が高いことがわかる。しかしながら、中年層、若年層ともに有意差は見られないことから、動詞型引用表現においては、「文末」と「従属節末」との差異は認められないといえる。

(b) 名詞型引用表現の場合

中年層と若年層では、ゼロ形の使用のあり方が異なっている。中年層では、「同格」と「提題」におけるゼロ形の使用率が違っており、その使用率から「同格」の方が「提題」よりもゼロ形を促進する要因であることがわかる。また、有意差も1％水準で見られることから、「同格」がゼロ形の使用を促す要因であることがわかる。一方、若年層では、「提題」「同格」のいずれの場合においてもゼロ形の使用はまったく見られなった。ここから、若年層においては、動詞型引用表現のみにゼロ形の使用が見られることがいえる。

(c) 両者の比較

(a)(b)で動詞型引用表現と名詞型引用表現におけるゼロマーク化のあり方について検討してきた。ここで、両者のどちらがゼロ形の使用を促進するのかについて検討する。表8に動詞型引用表現と名詞型引用表現におけるゼロ形のあり方について示したものである。

表8　櫨谷町中年層・若年層におけるゼロマーク化に関わる言語内的条件の比較

	ゼロ形(%)	実数	χ^2	*df*	有意性
中年層					
動詞型引用表現	79.4	281/354	21.224	1	*p.* <0.000
名詞型引用表現	50.0	26/52			
若年層					
動詞型引用表現	8.6	15/175	2.408	1	*p.* <0.121
名詞型引用表現	0.0	0/26			

表８から、中年層においては、動詞型引用表現の方がゼロ形の使用率が高いことがわか

る。有意差も0.1%の水準で見られることから、ゼロ形は動詞型引用表現においてより多く使用されることがいえる。また、若年層においても、ゼロ形が名詞型引用表現では使用されなかったため、動詞型引用表現にゼロ形が使用されやすいといえよう。

4．2．2．櫨谷町におけるゼロマーク化に関わる制約条件の変容について

以上櫨谷町の中年層、若年層におけるゼロ形にかかわる条件について検討してきた。西神ニュータウン居住者の分析を行う前に、旧来から存在する地域社会に見られる言語変容のプロセスについてまとめておく。

表9　櫨谷町におけるゼロ形に関わる制約条件の変遷

	老年層	中年層	若年層
全体	動詞型引用表現	動詞型引用表現*	動詞型引用表現
動詞型引用表現	従属節末	文末	文末
名詞型引用表現	同格	同格**	—

注：表中（*）は有意差が0.1%水準で(**)は5%水準で見られたことを示す

表9は、前節の結果をもとに作成したものである。表9から櫨谷町における傾向として、ゼロ形が使用される条件が限定されるようになったといえる。そのあり方としてはまず、動詞型引用表現では、ゼロ形は、老年層では「従属節末」、中年層、若年層では「文末」に多かったが、いずれの場合においても有意差が見られなかったことから、動詞型引用形式における制約条件は存在しないと考えられる。一方、名詞型引用表現では、老年層・中年層では「同格」におけるゼロ形が多用されるが、若年層になると、ゼロ形がまったく使用されなくなるのである。

このように旧来から存在する地域社会において、ゼロ形が使用される統語的条件の変容のあり方は、形式が使用される統語条件によって異なることが明らかとなった。それでは、櫨谷町に隣接する西神ニュータウン居住者の間では、ゼロ形の使用をめぐる統語的条件はどのようなものなのだろうか。次節では、西神ニュータウン居住者の中でも、ゼロマーク化を出身方言にもつ兵庫県出身者のおけるゼロ形の使用のあり方について検討し、言語変容のプロセスを抽出していくことにする。

4．2．3．西神ニュータウン居住者におけるゼロマーク化に関わる制約条件

次に西神ニュータウンにおけるゼロ形の使用に関わる制約条件について検討することに

する。本節ではその中でも兵庫県出身者に見られる特徴について取り上げる。[4] 西神ニュータウンの居住者の多数を占める兵庫県出身者におけるゼロマーク化のあり方はどのようなものなのだろうか。結果を表10に示した。なお表中、若年層は名詞型引用表現でゼロ形を全く使用しなかったため、カイ二乗検定は行っていない。

表10　西神ニュータウンにおけるゼロマーク化に関わる統語条件

	統語条件	ゼロ形(%)	実数	χ^2	*df*	有意性
中年層話者						
動詞型引用表現	文末	30.4	14/46	5.999	1	p.< 0.014
	従属節末	63.2	12/19			
名詞型引用表現	提題	6.7	1/15	1.034	1	*p.*<0.309
	同格	0.0	0/15			
若年層話者						
動詞型引用表現	文末	5.0	6/120	9.471	1	p.< 0.002
	従属節末	25.0	5/20			
名詞型引用表現	提題	0.0	0/54			
	同格	0.0	0/30			

表10から、統語的条件ごとに西神ニュータウン居住者に見られる特徴をまとめておく。

(a) 動詞型引用表現の場合

中年層・若年層ともに、ゼロ形の使用率から従属節末の方が文末よりもゼロ形の使用を促進する要因として働いていることがいえる。また、中年層、若年層ともに有意差が0.1%水準で見られることから、西神ニュータウン居住者の間では、動詞型引用表現の場合、従属節の方がゼロ形の使用が多いといえる。

(b) 名詞型引用表現の場合

全体的にゼロ形が使用される割合が非常に低く、中年層でわずか1例使用が見られたほかは、ゼロ形は使用されないことがわかる。ここから、兵庫県出身者の間でもゼロ形が使用されるのは、動詞型引用表現のみであることがいえる。

(c) 両者の比較

(a)(b)から動詞型引用表現と名詞型引用表現におけるゼロマーク化のあり方について分析してきた。前節同様、両者のどちらがゼロ形の使用を促進するのかについて検討する。結果を表11に示した。

表11　西神ニュータウン居住者におけるゼロマーク化に関わる言語内的条件の比較

	ゼロ形(%)	実数	χ^2	*df*	有意性
中年層					
動詞型引用表現	40.0	26/65	13.565	1	*p.* <0.000
名詞型引用表現	3.3	1/30			
若年層					
動詞型引用表現	7.9	11/140	6.941	1	*p.* <0.008
名詞型引用表現	0.0	0/84			

表11から、中年層、若年層においてともに、動詞型引用表現の方が名詞型引用表現よりもゼロ形が使用される割合が高く、中年層では0.1%水準で、若年層では1%水準で有意差が見られる。ここからゼロ形の使用には、動詞型引用表現の方が多いといえよう。

4．2．4．西神ニュータウンにおけるゼロマーク化に関わる制約条件の変容について

ここで、西神ニュータウンにおけるゼロマーク化をめぐる統語的制約条件の変遷についてまとめておく。西神ニュータウンが旧来から存在する地域社会と同じであれば、ゼロ形の使用に関わる条件も、櫨谷町居住者と同じであるはずである。前節の結果をもとに西神ニュータウン居住者におけるゼロマーク化の制約条件を表12にまとめた。なお、表中櫨谷町居住者との比較をするために、櫨谷町老年層の結果も示してある。

表12　西神ニュータウン居住者におけるゼロ形に関わる統語条件

	老年層	中年層	若年層
全体	動詞型引用表現	動詞型引用表現*	動詞型引用表現**
動詞型引用表現	従属節末	従属節末**	従属節末**
名詞型引用表現	同格	—	—

注：表中（*）は有意差が0.1%水準で(**)は5%水準で見られたことを示す

表12から、西神ニュータウンにおいても、ゼロ形が使用される条件が限定されることが見てとれる。そのあり方を条件ごとにまとめると、まず全体的な傾向としてゼロ形が使用されるのは動詞型引用表現の場合であることが挙げられる。これは櫨谷町居住者と共通して見られる特徴である。

次に動詞型引用表現では、櫨谷町とは異なり、「従属節末」がゼロマークを促進する要因になっていることが特徴的である。「文末」「従属節末」ともにゼロ形を多く使用する櫨谷町居住者とは異なる結果となった。このような違いを生み出した要因に、発話に払われる注意度が挙げられる。発話の始めと終わりに払われる注意度は高くなりやすいことから、ニュータウン居住者は方言接触場面において、「文末」により共通語的な形式を使用するようになったと考えられる。つまり、従属節末にゼロ形が使用されるようになったのも、従属節末の方が比較的注意度が払われにくいためであると考えられる。

また、名詞型引用表現においては、西神ニュータウン居住者の間ではゼロ形がほとんど使用されないという結果となった。櫨谷町では、若年層でゼロ形を使用しなくなる結果が得られたが、西神ニュータウンにおいては、中年層ですでにゼロ形は使用されなくなっているのである。「提題」と「同格」はともに引用動詞「言う」の語彙的意味が文法化を経て稀薄したものである（日野2001、Suzuki 1999）が、分析の結果からゼロ形は文法化が進んだ条件から使用されなくなるのではないかと考えられる。櫨谷町においても、名詞型引用表現におけるゼロ形の使用率は動詞型引用表現よりも低かったことを考え合わせると、このような傾向は一般化できるように思われる。

このように西神ニュータウンでゼロマーク化に関わる統語的条件について検討してきた。結果から、西神ニュータウンにおける統語的制約条件の変容のあり方は、櫨谷町とは異なることが明らかとなった。ここから、ゼロマーク化を方言体系の中で持ち合わせていても居住する地域が異なることで、ゼロ形の使用をめぐる制約条件に差異が生じたと考えられる。次節では、このような違いがニュータウンという移住者社会に特有のものかどうかについて検討することにする。

５．西神ニュータウンで起きた言語変容の特異性について

本節では分析の結果をもとに、西神ニュータウンで起きている言語変容が移住者社会に特有のものかどうかについて考察する。以下、5.1節で、西神ニュータウン居住者でも他地方出身者によるゼロ形の使用のあり方に注目し、兵庫県出身者から得られた結果がニュータウンの特徴として一般化できるかどうか検証する。次に5.2節で、ゼロ形と並行して使用される引用形式のあり方について整理し、5.3節で引用形式でも「ッテ」が多用されるようになったプロセスを捉える。そして5.4節で、西神ニュータウンにおいて短期間に起きる言語変容に見られる特異性について検討する。

5．1．他地方出身者におけるゼロマーク化に関わる制約条件

まず、出身方言にゼロ形を持ち合わせていない他地方出身者におけるゼロマーク化のあり方について検討する。兵庫県出身者の結果については4.2.3節で分析したが、そこで得られた結果は、一般化できるのであろうか。他地方出身者の結果を表13にまとめた。

表13　他地方出身者におけるゼロマーク化に関わる統語条件

	統語条件	ゼロ形(%)	実数	χ^2	*df*	有意性
中年層話者						
動詞型引用表現	文末	1.4	3/222	.023	1	*p*.< 0.880
	従属節末	1.1	1/88			
名詞型引用表現	提題	0.0	0/46			
	同格	0.0	0/62			
若年層話者						
動詞型引用表現	文末	1.9	2/107	.048	1	*p*.< 0.826
	従属節末	2.4	1/41			
名詞型引用表現	提題	0.0	0/59			
	同格	0.0	0/26			

表13は、他地方出身者の統語的条件ごとにおけるゼロ形率を示したものである。この表から、このグループに見られる特徴をまとめておく。

(a) 動詞型引用表現の場合

全体的にゼロ形が使用される割合は中年層、若年層ともに非常に低く、使用数も2、3例確認されるのみである。その割合から、中年層では「文末」が若年層では「従属節末」が高いことがいえる。しかし、いずれも有意差が見られないことから、両者の差異は見られないといえる。

(b) 名詞型引用表現の場合

中年層、若年層ともにゼロ形は1例も使用されていないことがわかる。このグループにおいても「提題」「同格」を表す場合にはゼロマーク化は観察されないことが明らかとなった。

(c) 両者の比較

(a)(b)から、動詞型引用表現と名詞型引用表現におけるゼロ形の使用について検討してきた。ここで、両者のどちらにゼロ形の使用が多いのかどうか、検討することに

する。結果を表14に示した。

表14　他地方出身者におけるにおけるゼロマーク化に関わる言語内的条件の比較

	ゼロ形（%）	実数	χ^2	df	有意性
中年層					
動詞型引用表現	1.3	4/310	1.407	1	$p. < 0.236$
名詞型引用表現	0.0	0/108			
若年層					
動詞型引用表現	2.0	3/148	1.745	1	$p. < 0.186$
名詞型引用表現	0.0	0/85			

表14から、ゼロ形の使用率は非常に低く、使用数も3,4例のみであるが、動詞型引用表現の方がゼロ形を使用する頻度が高いことが中年層、若年層ともに確認できる。しかしながら、いずれの場合においても有意差は見られないことから、両者の違いは認められないといえる。

このように、他地方出身者におけるゼロ形のあり方について検討してきた。表13からも明らかなように、このグループはゼロ形自体ほとんど使用しないようである。兵庫県出身者とは「提題」「同格」を表す場合においては、ゼロ形をまったく使用しないという点で共通しているものの、動詞型引用表現で生起する場合のゼロ形の使用率は兵庫県出身者の方が高いことから、出身方言の影響によってゼロ形の使用が左右されるといえる。

そのような結果を踏まえると、西神ニュータウンではゼロ形以外の引用形式も使用されていることが考えられる。次節では、櫨谷町と西神ニュータウンにおける引用形式の使用実態を示し、両地域に見られる特徴を明らかにしたい。

5．2　ゼロ形の他に使用される引用形式について

本節では、ゼロ形の代わりに使用される引用形式の使用実態について取り上げることにする。引用形式は、関西方言においては、ゼロ形の他にも「チュー」などが、また、標準語形である「ト」や「ッテ」も西神ニュータウン、櫨谷町でそれぞれ使用されていることが予想される。引用形式の使用実態を示したのが表15である。

表15は「文末」で使用された引用形式をまとめたものである。どのグループもこの条件ではゼロ形を使用しており、他の使用形式と関係が把握できる。

表15　櫨谷町と西神ニュータウンで「文末」に使用される引用形式

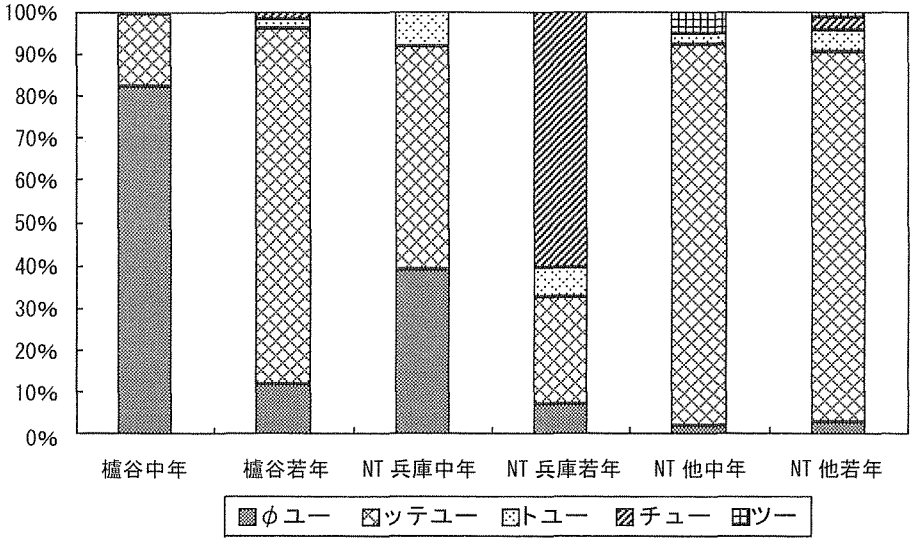

表15から、櫨谷町、西神ニュータウンにおいて、引用形式でも「ッテ」の使用率が若年層を中心に高くなっていることがわかる。中年層と若年層を比較すると、櫨谷町では、ゼロ形から「ッテ」への置き換えが起きていると考えられる。櫨谷町若年層では、「ト」や「チュー」などの形式の使用も見られるが、その使用数はそれぞれ1例、2例と少ない。

次に、西神ニュータウン居住者に目を向けると、兵庫県出身者では、ゼロ形の使用が少なくなる代わりに、「チュー」や「ッテ」の使用が多くなっていることがわかる。若年層で多用される「チュー」は、他のグループではほとんど見られない形式であるが、若年層の間に共通して使用される形式であるように思われる。実際この若年層のインフォーマント３人は同じネットワークに属していることから、この年代の特徴というよりは、このネットワークにおける特徴と判断した方がよさそうである。

一方、他地方出身者を見ると、「ッテ」の使用率が非常に高く、優勢形式になっていることがわかる。また、他の形式に「トユー」や「ツー」なども使用が確認できる。「ツー」は他地方出身者に見られる形式であるが、ゼロ形同様、西神ニュータウンで生活するなかで、ほとんど使用されなくなった形式の1つであるように思われる。

このように櫨谷町、西神ニュータウンでは、ゼロ形の他にも様々な引用形式が使用されていることがわかった。その中でも「ッテ」の使用はどのグループにも見られ、両地域における共通語的な形式として使用されているようである。そこで、次節ではこの「ッテ」が西神ニュータウンで多用されるようになったプロセスについて考察することにする。

5．3．西神ニュータウンにおける「ッテ」の使用について

表15から西神ニュータウン居住者の間では、ゼロ形の代わりに「ッテ」が多用される傾向にあること明らかとなった。本節では、この「ッテ」が多用されるようになった経緯について、検討することにしたい。

まず表1から西神ニュータウン居住者の4分の3は神戸市を含めた関西地方の出身者である。必然的にゼロマーク化を出身方言に持ち合わせている居住者が多数を占めているのである。しかしながら、ニュータウン居住者の談話資料からはゼロ形よりも「ッテ」が多用される結果となった。同様に、出身方言に「ツー」などの形式を使用している者の間でも、「ッテ」を多用するようになったのである。

そこで、ゼロ形を使用していたはずの西神ニュータウン居住者が「ッテ」を多用するようになったのは、次のような要因が考えられる。西神ニュータウン居住者には「ゼロ形」や「チュー」「ツー」などの形式を使用する人が生活していることが考えられる。このような状況において西神ニュータウン居住者が方言接触場面に遭遇したときに、話し相手との意思疎通を図るために、方言的性格の強い形式よりも共通語的な形式を使用するようになったと考えられる。このように、複数の方言が接触した際、方言的性格の強い形式が使用されなくなる傾向を水平化(levelling)と呼ぶ(Trudgill 1986) [5]、西神ニュータウンにおいて「ッテ」が多用されるようになったのも、水平化の結果によるものではないかと思われる。ゼロ形を含めた様々な引用形式を出身地の方言として持っている人が多数を占める地域社会で、その形式をそのまま使用せず、共通語形である「ッテ」を使用するようになっているのは、水平化による結果であると考えられる。

ここで、どうして「ッテ」が共通語的な形式として使用されたのかについて、検討する必要がある。標準語では、「ッテ」の他に「ト」が引用形式として使用されている。両者の違いについては、「ッテ」の方がくだけている（山崎1996、三浦1974）などの指摘はあるものの、両者の使い分けを決める言語内的条件については、まだ十分に検討されていない。ここでは「ッテ」が使用されるようになった要因として、「提題」を表す場合における使用のあり方から考察することにしたい。「提題」は西神ニュータウン居住者の間ではゼロ形の使用はわずかしか見られなかったことから、ゼロ形以外の形式が多用される環境であるといえる。

表16　櫨谷町と西神ニュータウンで「提題」に使用される引用形式

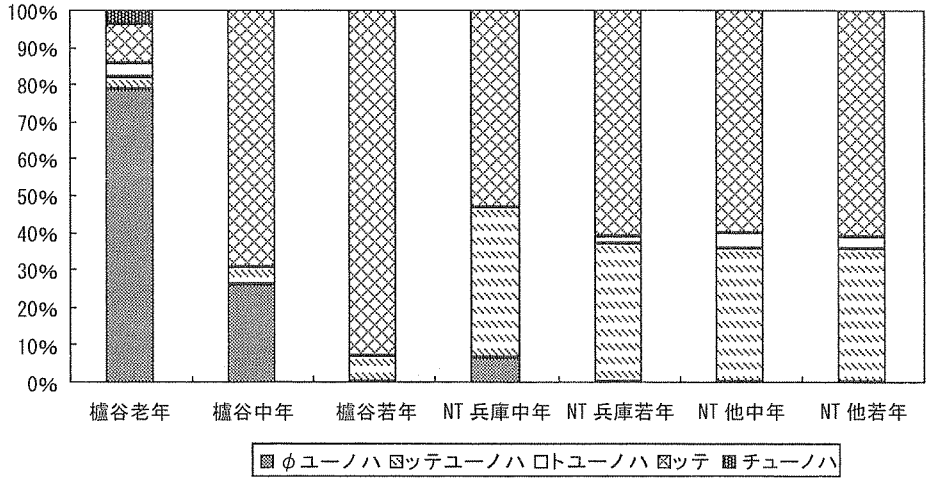

表16は「提題」における引用形式の使用についてまとめたものである。表16から、櫨谷町居住者の間では、「φユーノハ」から「ッテ」に置き換わっていることが見てとれる。「提題」のような名詞型引用表現には、「トイウ」自体が「ッテ」に置き換えられる（庵他2001）ことから、櫨谷町では、「φユーノハ」全体が「ッテ」に置き換わっていったと思われる。

一方、西神ニュータウン居住者の間では、「提題」を表す場合においては、「ッテ」＞「ッテユーノハ」＞「トユーノハ」＞「ゼロ形」の順で使用率が高いのである。ここで注目したいのは、「ッテユーノハ」という形式である。名詞型引用形式では、「ッテ」は「トイウ」に相当する形であるが、西神ニュータウン居住者の間では、「提題」を表す場合においても、動詞型引用形式における「『ト』＋『いう』」の「ト」が「ッテ」に置き換わった形式として使用されていることがわかる。表15から、文末においても西神ニュータウン居住者は「ッテ」を多用していることを考慮に入れると、「『ッテ』＋『いう』」という動詞型引用形式の形を名詞型引用形式まで拡張使用していると思われる。このような使用からも「ッテ」の多用化が進み、共通語的形式として広く使用されていると思われる。

５．４．方言接触からみた西神ニュータウンの言語変容について

前節で述べたように、ゼロ形ではなく「ッテ」が多用されるようになったのは、水平化の結果であり、動詞型引用表現における「ッテ+イウ」が名詞型引用表現への拡張使用な

どは、西神ニュータウンに特有の特徴であるといえる。本節では、西神ニュータウンにおける言語変容のあり方が特有なものであることを、引用形式間に見られる変容の程度という視点から捉えることにしたい。

一般に方言間の接触が多い場合におきる言語変容は、いわゆる伝統的地域社会よりも、早く起きることは指摘されている（Trudgill　1988）。西神ニュータウンにおいて、「ッテ」の多用される様子は、このような急激な言語変容を示しているように思われる。

表17　櫨谷町と西神ニュータウンで「同格」に使用される「ッテ」の使用率

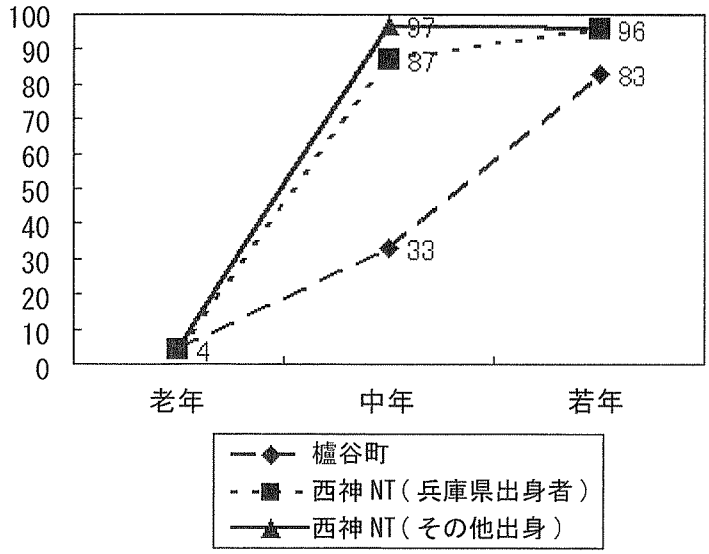

表17は「同格」を表す際の櫨谷町と西神ニュータウンにおける「ッテ」の使用率を示したものである。櫨谷町老年層のデータを基準とすると、両地域における言語変容のあり方に差異が生じていることが見て取れる。つまり、櫨谷町中年層における「ッテ」の割合は33%にとどまるのに対し、西神ニュータウン中年層でも兵庫県出身者の間では、「ッテ」の使用率は90%近くまで急激に上昇しているのである。このような差異はニュータウンが移住者社会であり、方言接触によって言語変容が急激に起こったと考えられる。このような変容のあり方もニュータウンに特有のものであるといえる。

6．まとめと今後の課題

本稿では、自然談話資料を用い、方言接触によって起きた言語変容のプロセスの特異性

について、引用形式のゼロマーク化を例として、分析してきた。旧来から存在する地域社会の居住者の談話資料をベースラインデータとして比較・対照した結果、移住者社会に特有の言語変容が起こっていることが明らかになった。その言語変容を次の3点にまとめておく。

(a)　西神ニュータウンと櫨谷町とではゼロマーク化に関わる言語内的制約条件に差異が生じることが明らかとなった。兵庫県出身者と櫨谷町居住者におけるゼロ形の使用のあり方から、まず、動詞型引用表現では櫨谷町では、「文末」「従属節末」におけるゼロ形の使用に差異は見られないが、西神ニュータウンでは従属末に使用が多いなどの違いがあることが明らかとなった。しかし、この傾向は兵庫県出身者に特徴的であり、他地方出身者には見られなかったものである。その一方、名詞型引用表現では、櫨谷町ではゼロ形の使用は見られたものの、西神ニュータウン居住者の間では居住者の出身地に関わることなくゼロ形はほとんど使用されなかった。

(b)　ゼロ形以外で使用される引用形式には「チュー」や「ツー」などの形式もあるが、「ッテ」が多用されていることが特徴的である。「ッテ」が多用されるようになったのは、「ゼロ形」や「チュー」「ツー」などの方言的性格の強い形式が方言接触場面で使用されなくなり、逆に共通語形である「ッテ」が使用されるようになったためではないかと思われる。これは、方言的性格の強い形式が使用されなくなるという水平化の結果であると考えられる。

(c)　「ッテ」が多用される中で「『ッテ』＋『いう』」という動詞型引用表現のパターンが名詞型引用表現にまで使用する傾向が見られた。文末における引用形式の使用実態から、動詞型引用形式で「ッテ」が多用されるようになり、その使用されるパターンがそのまま名詞型引用表現まで使用されるようになったものと思われる。

本稿では、ゼロマーク化に関わる統語的条件について取り扱った。しかしながら、ゼロマーク化をめぐっては、他にも引用動詞のウ音便化との関係や埋め込み文末の音が長音化することとの関係などについても検証する必要がある。本稿では、統語的条件をめぐるゼロマーク化のあり方についてのみ扱ったが、今後はこのような音声的な条件についても検証してきたい。また、否定辞などの言語変数を分析の対象とし、ニュータウンのような移住者社会で起こっている言語変容のプロセスを解明していきたい。

【注】

1)　括弧内は、話者と録音テープの該当箇所が示してある。また例文は議論に必要と思われる箇所のみを片仮名で表記する。プライバシーに関わる部分は□□で伏せる。

2) 空範疇原理（ECP ： Empty Category Principle）とは、論理形式（Logical Form）における空範疇の分布を規制するもの（荒木一雄・安井稔編1992）。Chomsky（1981 訳は荒木・安井1992:467-468)では、空範疇原理を

(1) 空範疇は適正に統率されていなければならない。

(2) a 適正統率

αはβを統率しかつ、i) αは語彙範疇(lexical category)X0であるか、またはii)αとβに同一指標が付与されている場合にのみαはβを適正統率する。

b 統率

αを支配しているすべての最大投射(maximal projection)がβを支配し、かつβを支配しているすべての最大投射αが支配している場合にのみ、αはβを統率する。

と定義している。

3) 例文中、Sは文、$\bar{S}$ は補文、vpは動詞句、$[_{COMP}$ e]は補文標識、丸括弧は、省略可能であることを示す。

4) なお本稿では、兵庫県出身者の中年層インフォーマントは、西神ニュータウンに移住するまではゼロ形を使用していたという前提で分析を行うことにする。

5) 水平化は、移住者の間で見られるもので、これまでイギリスのニュータウンであるミルトンキーンズ(Kerswill and Williams 1992, 2000)やニュージーランド英語（Trudgill, et al. 2000）などで示されている。

【参考文献】

荒木一雄・安井稔（編）（1992）『現代英文法辞典』三省堂.

庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.

楳垣　実（1962）『近畿方言の総合的研究』三省堂.

神鳥武彦（1998）「総論」平山輝男（編）『広島県のことば』日本のことばシリーズ　34　明治書院.

岸江信介（1992）「近畿方言の動態と分布の関連」『日本語学』vol.11-5.

神戸市港湾整備局（1995）『新都市整備本部事業便覧』神戸市港湾整備局新都市開発課.

国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞－用法と実例』秀英出版.

白井博之（1996）「『ケド』で言い終わる文」『日本語教育学科紀要』6　広島大学教育学部日本語教育学科.

高永　茂（1986）「広島県宮島方言の『ト抜け』に関する社会言語学的考察」『第42回方言研究会発表原稿集』　日本方言研究会.

高橋太郎（1993）「省略によってできた述部形式」『日本語学』12-10.

日野資成（2001）『形式語の研究　―文法化の理論と応用―』九州大学出版会.

福谷自治会古里創成誌編集委員会（1997）『古里福谷の創成』神戸市西区櫨谷町福谷自治会　私家版.

前田　勇（1977）『大阪弁』朝日新聞社.

三浦　昭（1974）「『と』と『って』」『日本語教育』24.

南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.

山崎　誠（1996）「引用・伝聞の『って』の用法」『国立国語研究所研究報告集』17.

Chomsky, Noam. (1981) *Lectures on Government and Binding*: Dordrecht:Foris Publications.

Kerswill, Paul and Ann William. (1992) Some principles of dialect contact:evidence from the New Town of Milton Keynes. In I. Philippaki-Warburton & R. Ingham (eds.) *Working Papers 1992*, Dept. of Linguistic Science, University of Reading, pp. 68-90.

Kerswill, Paul and William, Ann. (2000) Creating a new town koine:children and language change in Milton Keynes. *Language in Society* 29: 65-115.

Labov, William. (1972) *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia:University of Pennsylvania Press.

Saito, Mamoru. (1987) Three notes on syntactic movement in Japanese. In Takashi Imai and Mamoru Saito (eds.), *Issues in Japanese Linguistics*. Dordrecht:Foris Publications, pp. 301-350.

Suzuki, Ryoko. (1999) *Grammaticalization in Japanese:a study of pragmatic particle-ization*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of California at Santa Barbara.

Trudgill, Peter. (1986) *Dialects in contact*. Oxford: Basil Blackwell.

Trudgill, Peter. (1988) Interlanguage, interdialect and typological change. Susan Gass, Dennis Preston, Carolyn Madden and Larry Selinker (eds.) *Variation in Second Language Acquisition:Psycholinguistic Issues*. Clevedon:Multilingual Matters, pp. 243-253.

Trudgill, Peter, Elizabeth Gordon, Gillian Lewis and Margaret Maclagan. (2000) Determinism in new-dialect formation and the genesis of New Zealand English. Journal of Linguistics 36: 299-318.

（博士後期課程学生）

（2002年9月4日　受付）
（2002年10月17日　修正版受付）
（2002年10月24日　掲載決定）